

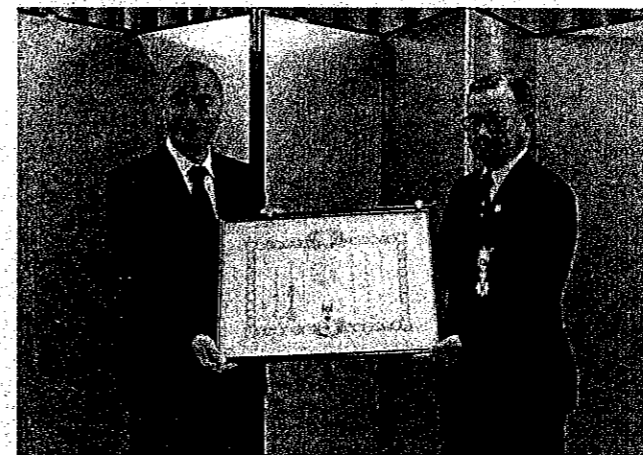
人物探訪

台湾高座会 総会長・李雪峰 ～70年目の喝采(後編)

文・写真／志村宏忠＝編集部



靖国神社にて



交流協会台北事務所所長の樽井澄夫と

46年夏、台南から福建省廈門(アモイ)へと飛んだ李雪峰は、唐の時代に貿易港として栄えた泉州の小さな漁港から船で日本を目指した。この密航劇には帰国を試みたと思われる日本人が途中で加わった。だが、いざ乗り込もうとした船の底には亀裂が入っていて、出港をあきらめたのである。

2・28事件発生直後は、現在の二二八和平公園内にあつた台湾ラジオ放送局の局長が知り合ひだったことから、高座上殿出身の仲間たちに中山堂(旧台北市公会堂)に集まるよう呼びかけた。内戦中の中国大陸から豊

富な武器と共に台湾へ派遣、増員されつつあつた国民党軍に対し、丸腰の市民がかなうはずもない。李雪峰は仲間たちにくれぐれも自重するよう促した。

自身は大陸から精鋭部隊が来るのと入れ替わるように47年3月からしばらく、上海に逃げて難を逃れた。上海には義兄の陳重光(戦後に台湾ヤクルトの総経理などを歴任)のつてがあったからである。基隆から上海に向かう船内で台北市警察局長だった陳松堅と知り合う。

陳松堅は2・28事件の責任を問われて台

李雪峰や後に總統になる李登輝を乗せた米山丸は1947年の旧正月前には基隆港に無事到着していた。船の中で李雪峰は、台北市内の実家の近所の朝食店で、久しぶりに杏仁茶と油條を口にするのを待ち望んでいた。ところが「自分たちの国」にたどり着いた彼らは船内で足止めを食う。

発症が原因で途中の佐賀・唐津港で下船していた台湾人が赤痢(天然痘という説もある)にかかっていたことが確認されたため、全員下船を禁じられたのである。その期間は3週間ほどに及んだ。

司馬遼太郎の『台湾紀行』にはこのときの船内の様子に触れた章がある(「二隻の船」)。船内は(神奈川県厚木の海軍関係の工場に

微用されていた台湾系のひとたち)、すなわち現在の高座会の面々と李登輝をはじめとする《内地留学生》とその家族の二派に分かれていたとある。船内での閉ざされた生活が続いたこともあり、自然と摩擦が生まれたらしい。《工員たちは元気がよかつた。かれらは暴動をおこし、炊事場を占領してしまつた。》

引用は控えるが、この後も司馬らしいスケールの大きい形容を用いた船内描写は続く。だが当事者の李雪峰によれば、事実はこういうことだつた。

「留学生組の夫婦が飲料水を使って赤ん坊のオムツを洗っていたことを私の仲間がとがめたのだが、相手が非を認めなかつたので口論が起きた」。それに、高座組は神奈川県から餓別代わりに大量の米をもらつて船底に積んでいたから飢える心配などなかつたそうである。

46年夏の日本への密航未遂

およそ3年半ぶりに台北に戻つた李雪峰が目にしたのは、日本統治下では見られなかつた治安の混沌と物価の高騰だつた。本省人の間には新たな統治者(外省人)に対するいら立ちが明らかに募つていた。翌47年の「2・28事件」が起きる萌芽はすでに現れていた。

こうした環境に置かれた台湾人の多くが急速に中華民国に失望し、日本への密航を試みたのは無理からぬことだつた。李雪峰もその一人である。「日本に行けば商売ができる。進学だつて不可能じゃない」と勧める知人の誘いに乗つた。

台湾省行政長官の陳儀に誠首された。中華民国の当時の首都である南京で国民党中央委員会の会合が行われることになつていたので、釈明するために船で大陸に戻る途中だつた。李雪峰はこのときの陳松堅の様子を「命からがら逃げ出すような」と形容した。自分のように国民党政府内で役職にある者ですら、失敗すればどのような処罰を受けるか分からない。まして、一度刃向かつた台湾住民がどんな目に遭うかは分かるだろう。陳松堅はそんな言葉を残していった。「安心できない、頼りにできない国家」になつたものだ、と、李雪峰は胸の内を感じていた。

戦後日本との窓口は沖縄

日本への望郷の念を抱きながらも中華民国台湾省の一員として第二次大戦後、李雪峰は新たに歩みだす。しばらくは父親の営んでいた雜穀店を手伝つたりした後、貿易会社の恵康貿易の運営に乗り出した。

それからほどなく、沖縄のゼネコンの国場組幹部が台湾との貿易を望んで台北にやつて来た。政府当局の職員を紹介して創業者の国場幸太郎の知遇を得た李雪峰は国場組台北事務所の所長を任じられる。

後に、沖縄から台湾へ視察や研究・研修に訪れる人たちの受け入れと案内を主な業務とした旅行代理店も経営した。戦後の日本と李雪峰をつなぐ窓口になつたのは米軍施政下の沖縄だつた。

中華民国(蔣介石周辺)の発案で台湾と沖縄との交流が始まつたのは1950年代の後半からである。窓口機関として中琉文化

人物探訪

旭日小綬章の伝達式



経済協会が58年3月に生まれ、理事長には国民党員の中の戦前の日本留学組である方治(ほうじ)が就任した。すでに沖繩と交流していた李雪峰は同協会の理事に迎えられ、方治への親交を深める。

いまは台湾の駐日代表処那覇分処であるこの組織が、冷戦のさなかに生まれた真の理由は沖繩の赤化と共産化を防ぐことにある。その証左として、同協会の運営費用は国民党の海外工作委員会から出ている。沖繩県与那国町と花蓮市は82年10月に姉妹都市提携をしているが、仲立ちをしたという李雪峰によれば、台湾に最も近い与那国島での中国の浸透を防ぐ戦略的な狙いもあった。

李雪峰は88年ごろまで国場組台北事務所日には台北国賓大飯店(アンバサダーホテル)で祝賀会も催された。

17日の伝達式の後、日本からの特派員らに囲まれた李雪峰は「日本は私たちを忘れなかった」と叙歎のよるこびを吐露した。日本を愛してやまない彼が「ただけ言いたいことがあるとすれば、次のようになる。」

「サンフランシスコ講和条約を結んだときに、台湾の国際的な地位について当時の日本政府から世界に向けて、『台湾人による自立した国家を造るのが望ましい』という一言加勢がなかったのが残念だった」

高座会という「宿命」を生きる

すべてが終わった後の6月22日午後、台北市内のホテルで、本稿を書くための最後の取材に臨んだ。高座工廠にかかわってから70年の間で最も思い出に残っていることは何かと尋ねると、留日50周年を記念し、台湾高座会で資金を集めて大和市の引地川公園に、あずまや「台湾亭」を寄贈したことを挙げた。「台湾高座会、ここに在り」という意気込みを示すために建てたものだから」

高座工廠にかかわって以来の長い時間を振り返って李雪峰はこう言った。「仕事ではいろいろな事をした。しかし結局最後に、『何をした』ということが思い浮かばない」

意外な言葉を聞いた思いの筆者を前に、数え年で米寿を控えた李雪峰が問はず語り続ける。「宿命だったんだと思うね。高座会を作ったままで運営してきたことは、名古屋で亡くなった人々たちへはなむけじゃないかとね」

長を務め、ビジネスを通じた沖繩との関係は30年に及んだ。交流はその後も続いていて、台湾留学経験のある沖繩県人などからはいまでも慕われている。

本人不在のまま会長に選出

第二次大戦が終わって18年、李雪峰の脳裏に「高座」の二文字が再び浮かぶことになる。きっかけは63年11月、神奈川県大和市の豪徳寺の境内に、第二次大戦中に亡くなった台湾人少年工の慰霊碑が建立された、というニュースが台湾に伝わったことだった。

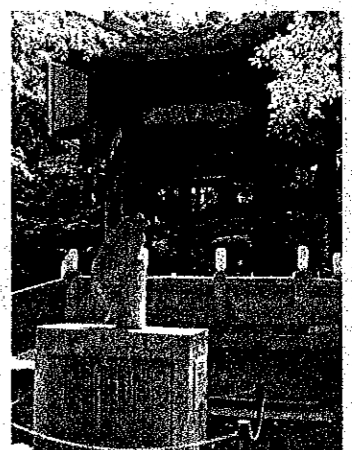
高座工廠で技手(ぎて)を務めて台湾人少年工たちと苦楽を共にした早川金次が私費で建てたものだった。早川は45年7月30日の空襲で部下の台湾人を戦死させてしまった。そのことを気にやんでの義挙であった。

それを機に、戦後も日本に残った台湾人少年工を中心に「日本高座会」が64年に設立された。台湾でも高座工廠の仲間たちが集まる機運が高まる。だが当時の中華民国は戒厳令下であり、集会・結社の自由が禁じられていた。そのため、まず同窓会名目で地域ごとに仲間同士の連携を図った。国民党と警察組織の監視を横目に見ながらの動きだった。

82年に台北高座会ができたのを皮切りに6年間で20の区会ができる。当時の總統の蔣経国は87年7月に戒厳令を解除すると決断、李雪峰らが「待ちに待った」時がつかいに来た。台湾高座会の全国大会は88年6月に台中で開催された。

このとき会長選挙があり、李雪峰が初代会長に選ばれている。実はこのとき李雪峰は会長を務め、ビジネスを通じた沖繩との関係は30年に及んだ。交流はその後も続いていて、台湾留学経験のある沖繩県人などからはいまでも慕われている。

李雪峰が44年12月、当時配属されていた三菱重工名古屋航空機製作所で米軍の空襲に遭い、寮長として面倒を見ていた台湾人少年工25人の命を失ったことは前編で紹介した。「名古屋で亡くなった人々」とは彼らのことを指す。だからこのあたりで休ませてもらうおうということですよ。(彼らも)分かってくれるでしょう」



大和市の引地川公園にある台湾亭

場にはいない。彼と戦後日本との接点となった国場幸太郎が死去し、沖繩で告別式が行われ出席していたからだ。以来、李雪峰は台湾高座会の事実上の会長を務めている。

日本と台湾の高座会が交わるようになったとき、推進役となったのが元大和市議会議員長の石川公弘だった。前編で紹介したとおり、石川の父親の明雄は高座工廠の寄宿舎の舎監だった。李雪峰がいまも敬慕する人物の一人である。92年に大和市を訪問した高座会の新海区会の一行が、偶然に知り合ったのがその息子だった。

そして、石川らの尽力で高座会の一期生の留日50周年となる93年、同60周年となる2003年に神奈川県内で盛大な歓迎大会が行われた。60周年大会では台湾高座会の会員たちに旧制工業中学の「卒業証書」と感謝状が贈られている。

5月9日に座間市で開かれた70周年大会が終わって約1カ月後の6月17日、交流協会台北事務所地下1階の文化ホールで、高座会の関係者らが、いつかいつかと待っていた李雪峰に対する旭日小綬章の伝達式が行われた。翌18

70周年の節目を終えた台湾高座会の今後の方向性は役員会に諮られる。李雪峰には彼なりの考えがあるのだが詳細は記さない。日本と高座会のために生きてきた男が、娘や息子、孫ひ孫たちに囲まれて一人の「阿伯」(アベ)。台湾語でおじいさんのことに戻るときが来たらしい、とだけ書いておく。(文中敬称略、終わり)



叙歎の祝賀会で家族・親族と共に

【参考文献】
『二つの祖国を生きた台湾少年工』(並木書房)